

令和 2 年 7 月 10 日現在

機関番号：33301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K03823

研究課題名(和文) インドのNGOがマイクロファイナンスの地域浸透と機能、女性の経済力に与えた影響

研究課題名(英文) The impact of a microfinance program via self-help group on household income

研究代表者

木村 正信 (Kimura, Masanobu)

金沢星稜大学・経済学部・教授

研究者番号：50339983

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究はインドのNGOが提供しているマイクロファイナンスプログラムが女性の経済力、つまり家計所得に与える影響を考察した。研究方法は、インドのマハラシュトラ州オーランガーバード市マラスワダ地区にあるDhangaonとWahegaonという2つの農村において実施した、123名の女性へのアンケート調査を基本とした。推計の結果、当地区のNGOによるマイクロファイナンスプログラムを利用している女性の所得の方が利用していない女性と比べて、平均的に高いことがわかった。しかし、利用した女性グループ(SHG)の間でも、プログラムの効果に差異があることもわかった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究のマイクロファイナンスとは無担保の少額融資のことで、発展途上国では貧困対策や女性のエンパワメントの道具として活用されている。しかし、マイクロファイナンスが貧困対策として有効に機能しているか否かという問題については研究者の間で意見が分かれている。本研究では、現地へのアンケートを調査を行い、インドのマハラシュトラ州のNGOが行っている、女性グループ向けのマイクロファイナンスプログラムが貧困対策や女性のエンパワメントの道具として機能を果たしているのか、実証的に考察したことで、当該分野の実証研究の蓄積に貢献できた。

研究成果の概要(英文)：The objective of this research was to determine the impact factors of participation in a microfinance program via a self-help group (SHG) in India on household income, controlling for age, educational attainment, land ownership and household debt. We compare two villages in India where participants joined SHGs at the same time. This research is based on a questionnaire survey administered to people in Aurangabad, Maharashtra state, India, an area that is considered very dry and is totally dependent on monsoon rainfall. We discovered that the microfinance program has a positive effect on household income, when women participate in it. Moreover, a participant's household income is affected by the decision regarding which self-help group to join, and the probability of increasing her household income becomes higher if she joins a self-help group that has a close, family-like atmosphere (with members of the same caste and religion) and a sense that members trust and know each other.

研究分野：マクロ経済学

キーワード：マイクロファイナンス マイクロクレジット SHG

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

マイクロファイナンスとは無担保の少額融資のことで、発展途上国では貧困対策や女性のエンパワメントの道具として活用されている。しかし、マイクロファイナンスが貧困対策として有効に機能しているか否かという問題については研究者の間で意見が分かれている。マイクロファイナンスが自活を促すことを通じて貧困を削減する効果があるという研究がある一方で、マイクロファイナンスは家計所得や家計支出といったアウトプットに影響を与えないという研究や、むしろマイナスの影響を与えるという研究もある。そこで、インドのマハラシュトラ州の NGO が行っている、女性グループ向けのマイクロファイナンスプログラムを取り上げ、貧困対策や女性のエンパワメントの道具として機能を果たしているのか、実証的に考察し、当該分野の実証研究の蓄積に貢献したいと考え、本研究の着想に至った。

### 2. 研究の目的

インドにおけるマイクロファイナンスのムーブメントは 1992 年の Self-Help Group (SHG)-Bank リンケージプログラムの導入からスタートとした。SHG は日本語では「自助グループ」という訳になるかもしれないが、通常は訳さずにそのまま SHG と呼ぶことが多いようである。ここで、SHG とは主に女性だけで構成される農村ベースの金融仲介グループのことで、SHG に参加している女性は SHG から少額資金を融資してもらったり、SHG に貯蓄を行ったりすることができる。インドでは貧しい個人は銀行と取引することができないという問題がある。しかし、貧しい個人でもグループになればグループ全体の貯蓄額は大きくなるため、グループ単位で銀行に預金したり、融資を受けたりすることが可能になるのである。

インドの Self-Help Group (SHG)-Bank リンケージプログラムでは、まず NGO や銀行などが SHG を組織し、SHG に加入した女性には貯蓄を義務づける。そして SHG がそれらをまとめて銀行にグループ預金し、銀行からも融資を受ける。そのグループ預金と銀行融資を原資として、SHG はメンバーの女性たちに少額融資を行い、融資を受けた女性は自活のための事業を行い、返済を行っていくのである。

SHG を組織しトレーニングするのは NGO であるケースが多く、インドではおよそ 3,024 以上の NGO が Self-Help Group (SHG)-Bank リンケージプログラムに関わっているようである。しかし、NGO が関わっているマイクロファイナンスのプログラムがどの程度貧困対策として有効に機能しているのか、どのような特徴を持つ SHG であれば成功しやすいのかという、マイクロファイナンスの NGO の役割について調査した研究は少ない。そこで、本研究では、インドのマハラシュトラ州オーランガーバードに居を構える NGO 組織、Institute for Integrated Rural Development (以下 IIRD と呼ぶ)が当地の農村で行っているマイクロファイナンスに注目して、IIRD のプログラムが家計所得に与える影響を考察する。

### 3. 研究の方法

我々の調査地域はインドのマハラシュトラ州オーランガーバード市マスラスワダ地区にある Dhangaon と Wahegaon という 2 つの農村である。Dhangaon は 320 世帯 2,100 人の人口を持つ小さい村で、一方と Dhangton は 600 世帯 5,000 人の人口を持つやや大きい村である。両村の距離は短く 4 キロメートル程度で、徒歩での往来には 70 分ほどかかる。2 つの農村があるオーランガーバード市はインドの中西部に位置し、センサス 2011 によると、面積は約 10,100 平方キロメートル、人口は約 3,701,000 人、識字率は 80.4% (男性 89.3%、女性 70.8%) である。当地の主要産業は農業であり、主要作物はコットン、トウモロコシ、大豆、オレンジなどである。しかし、オーランガーバードは降水量が少ないことから、それらの作物はしばしば乾燥のダメージを受ける。そのためオーランガーバードの一人当たりの GDP は 40,824 インドルピーに過ぎず、人口の 27.22% が貧困ライン以下で生活している (センサス 2011)。

そのような地域で NGO の Institute for Integrated Rural Development (以下 IIRD) (1987 年オーランガーバード市マスラスワダ地区に設立) は農村支援事業を行っている。IIRD の主な事業は農産物の流通チャンネルの提供 (マーケットの開設、流通事業)、職業訓練プログラム、住宅支援、高齢者支援、新農業 (オーガニックコットンなど) の促進などである。また、IIRD は女性の自立支援事業にも積極的で、その一つが 1990 年代半ば頃からスタートした女性対象のマイクロファイナンスプログラムである。

IIRD が提供しているマイクロファイナンスプログラムは、既述の Self-Help Group (SHG)-Bank リンケージプログラムに極めて類似した特徴を持っている。やはり IIRD のプログラムも内部会計と外部会計の部分から構成されている。つまり、それには SHG 内部の資金の流れと、SHG と金融機関との間の資金の流れがあるのである。ここでいう SHG とは IIRD のプログラムに参加している 30 人程度の女性グループのことで、IIRD は複数の SHG を組織している。

SHG の女性メンバー一人ひとりに毎月の貯蓄を義務づけ、グループリーダーがそれをまとめて商業銀行に預金する。そして、メンバーからの預金と IIRD からのグループ貸付金を原資に、SHG 内部で少額資金を融資し合うというのが、IIRD のマイクロファイナンスプログラムの大きな流れである。SHG 内部で融資を受けた女性は農業をベースにした非公式ビジネス (露店、内職、家畜など) を行い、毎月、利子 (借入金の 2%) を付けて SHG に少しずつ返済を行うのである。SHG も IIRD から資金を借りているが、IIRD は無利子で SHG に融資している。これは、前述のように IIRD の主な事業は農産物の流通チャンネルの提供という農村支援事業にあるので、IIRD の顧客

サービスの一環としてマイクロファイナンスプログラムを提供していることによる。

女性なら誰でも SHG に参加できるというわけではなく、次の参加条件がある。

- ・農村住民であること
- ・土地所有者であること（ただし5エーカー以下）
- ・毎月の会合に参加すること
- ・オーガニック農業を促進するために IIRD が組織した女性農民グループのメンバーであること
- ・毎月、貯蓄を行うこと
- ・融資した資金の用途は農業をベースにしたビジネスであること
- ・他のメンバーからの推薦があること

我々はオーランガーバード市の同じマスラスワダ地区に住んでいる女性たちの中でも、IIRD のマイクロファイナンスを利用している女性と利用していない女性との間に所得差が存在するかどうかに関心がある。そこで、マスラスワダ地区の中にあるほぼ隣接し、条件に差のない2つの村、Dhangaon と Wahegaon で戸別訪問によるアンケート調査を実施した。アンケート調査は両村に居住する123人の女性から回答を得ることに成功した。アンケート実施の際には、その2つの農村で唯一マイクロファイナンスプログラムを提供している IIRD とその職員の協力のもとで行われた。アンケートは43項目からなり、今回の研究で使用するのには主に年齢、学歴、家族構成、職業といった女性の属性に関わる項目と、資産や所得といった女性の経済力に関わる項目である。

#### 4. 研究成果

Dhangaon と Wahegaon の2つの農村でアンケートを協力してくれた女性123人のうち、61人はSHGに参加しマイクロファイナンスを受け、62人はSHGに参加しておらずしたがってマイクロファイナンスを受けていない者であった。以降の分析ではSHGの参加（マイクロファイナンスプログラムの利用）の有無と家計所得の関係を推計し、IIRDによるマイクロファイナンスプログラムが貧困対策として有効に機能しているか否かを考察した。しかし、本研究ではランダムイゼーション（無作為化比較試験）によってデータを収集したわけではないので、プログラムそのものではなくプログラムに参加している女性たちの背景因子（年齢、家族構成、学歴、職業など）がアウトプットに影響を与えている可能性がある。

そこで本研究では傾向スコア法によるマッチングを使って、女性たちの背景因子をコントロールしながら、IIRDの利用の有無とそのアウトプットの違いを推計するという準実験的アプローチを採用した。社会科学の分野における傾向スコア法は、例えば職業訓練プログラムと賃金の関係などを調べる際に使われ、本研究ではそれをマイクロファイナンスプログラムと家計所得の関係を調べるために援用する。

本研究では女性たちの背景因子から予測されるマイクロファイナンスプログラムの参加確率が傾向スコアにあたる。本研究の傾向スコア（参加確率）は被説明変数をプログラムの参加の有無を示すダミー変数とし、説明変数を女性の背景因子としたロジット回帰モデルを推計することによって導いた。そして、プログラムの参加者グループと非参加者グループの中から傾向スコアが近い女性たちをそれぞれ選び、彼女たちの所得差を比較（マッチング）することで、プログラムの効果が推計される。

推計の結果、IIRDのマイクロファイナンスプログラムを利用している女性の所得の方が利用していない女性と比べて、平均的に高いことがわかった。しかし、利用して女性グループ（SHG）の間でも、プログラムの効果に差異があることもわかった。その理由としては、グループのソーシャル・キャピタル、つまりメンバー間の信頼度などが大きく影響しているのではないかと考察した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 Abhay Joshi and Masanobu Kimura	4. 巻 17
2. 論文標題 The impact of a microfinance program via self-help group on household income	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Journal of Food, Agriculture & Environment	6. 最初と最後の頁 35-41
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 2件）

1. 発表者名 西村めぐみ
2. 発表標題 Loan Group and Elements of Success in a Microcredit Group-Lending Program
3. 学会等名 日本国際経済学会 第77回全国大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 西村めぐみ
2. 発表標題 Loan Group and Elements of Success in a Microcredit Group-Lending Program
3. 学会等名 International Research Group on International Development Economics(IDE), (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 木村正信
2. 発表標題 マイクロファイナンスプログラムの家計所得への影響
3. 学会等名 日本マクロエンジニアリング学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 ジョシアバイ
2. 発表標題 Impact of a Micro-Credit Group Lending Program
3. 学会等名 European Microfinance Platform 5th European Research Conference on Microfinance (国際学会)
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分担者	J O S H I A b h a y  (JOSHI Abhay)  (30587671)	大東文化大学・経済学部・講師   (32636)	
研究 分担者	西村 めぐみ  (Nishimura Megumi)  (20641286)	共立女子大学・国際学部・准教授   (32608)	